

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月1日現在

機関番号：34603

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2012

課題番号：21710265

研究課題名（和文）インドのナショナルな大衆文化の系譜と演劇にみる地域的想像力の展開
—ゴアの場合研究課題名（英文）Genealogy of National Popular Culture in India and the Development of Local
Imagination in Theatre: The Case of Goa

研究代表者

松川 恭子 (MATSUKAWA, KYOKO)

奈良大学・社会学部・准教授

研究者番号：00379223

研究成果の概要（和文）：ゴアとムンバイ（旧ボンベイ）で合計4回の現地調査を実施した。20名以上のティートル関係者に対する聞き取り調査を行うとともに、プリント・メディアや映画に代表される20世紀のインドの大衆文化の発展に関する研究レビューを行った。その結果、以下3点が明らかになった。(1) 1950年代から1960年代にかけて、ボンベイのゴア・クリスチャンの移民ネットワークの中で現在のティートル公演の形式が確立されたこと。(2) ティートル俳優やミュージシャンたちは、映画産業ボリウッドと深い関わりを持っていたこと、(3) 1990年代にティートル公演の中心地がゴアに移動したこと。3本の論文、3回の学会発表などで研究成果を発表した。また、ボンベイのティートル関係者のインタビュー動画を10本作成した。

研究成果の概要（英文）：I made four fieldwork trips to Goa and Mumbai (former Bombay). I interviewed more than twenty people related to *tiatr* industry and reviewed literature on the development of popular culture in 20th century India such as print media and cinema. Through this research, the following three points were clarified. (1) The current form of *tiatr* performances was established around the 1950s and 1960s in the networks of Goan Christian migrants in Bombay; (2) *Tiatr* actors/actresses and musicians had interactions with Indian cinema industry, Bollywood; (3) The center of *tiatr* performances shifted to Goa in the 1990s. I published 3 articles and read 3 papers in academic conferences based on this research. I also produced 10 movie clips based on the interviews with Bombay *tiatr* people.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	22,810	6,843	29,653
2012年度	877,190	263,157	1,140,347
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：総合人文社会

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：①文化人類学 ②インド・ゴア州 ③大衆演劇 ④ティートル ⑤ネーション

⑥大衆文化 ⑦地域的想像力

1. 研究開始当初の背景

本研究の学術的背景として、1990年代以降に蓄積されてきた、インドにおける大衆文化を介した公衆性についての議論の潮流がある。ウベロイ (Uberoi 2002) やピニー (C. Pinney 1998) などの論者たちは、ポスター・宗教画、カレンダー・アート、写真、映画など、複製技術の発展によって生まれた消費物を通じて、人々が「ネーション」を想像する過程を分析している。また、フライターク (Freitag 2003) は、18世紀以降、英国植民地支配の確立により、芸術活動を支えてきたパフォーマーたちが藩王国から都市部へと移り、「視覚 (ヴィジョン)」に訴える大衆文化の担い手となったと論じている。だが、一連の研究では、大衆文化とネーションの結びつきが強調されており、インドの多様な地域における大衆文化の受容とその影響、地域社会の再編成という視点が欠けていた。

そのため、インド・ゴア社会の演劇ティアトルを事例に、大衆文化の想像力がネーション意識を生み出す一方で、地域アイデンティティの再編成に環流し、独自の発展を遂げていった過程を明らかにすることを目的として、本研究を開始した。

Freitag, Sandria B., 2003, "Visions of the Nation: Theorizing the Nexus between Creation, Consumption, and Participation in the Public Sphere," R. Dwyer and C. Pinney (eds.), *Pleasure and the Nation: The History, Politics and Consumption of Popular Culture in India*. Oxford University Press.

Pinney, Christopher, 1998, *Camera Indica: The Social Life of Indian Photographs*. University of Chicago Press.

Uberoi, Patricia, 2002, "Unity in Diversity? Dilemmas of Nationhood in Indian Calendar Art," *Contributions to Indian Sociology*, Vol. 36, No. 1-2, 191-232.

2. 研究の目的

本研究が目指すのは、西部インド・ゴア社会の大衆演劇ティアトルの系譜を歴史的資料と現在の実践者に対する文化人類学的聞き取り調査によって明らかにし、19世紀から現在のインドにおけるナショナルな大衆文化の系譜のなかに位置づけることである。

従来の研究で明らかにされてきたように、大衆文化の想像力が地方、都市を経てネーション意識を生み出す一方で、そのナショナルな大衆文化が、地域アイデンティティの再編成に環流し、独自の発展を遂げていった「地域的想像力」の編成過程に着目する。本研究でキーワードとなる「想像力」の語について

は、C・W・ミルズ (『社会学的想像力』) や A・アパデュライ (『さまよえる近代』) の用法を発展させ、自己を取り巻く世界を理解するために必要な力、と定義し、地域社会がグローバル化された公共圏・市民社会にアクセスする可能性についてより能動的に描き出すことを試みる。地域社会に固有の歴史・社会関係と結びついた知識・情報の伝達と共有のメカニズムに歴史的な状況が重なって、地域社会の想像力が発現してきたことに留意する。

本研究が最終的に目指すのは、人々が大衆文化を単に消費するだけでなく、その中で独自の想像力を働かせてグローバル化した世界における自分のポジションを理解し、声を発していくことのできる可能性について考えていくことである。

3. 研究の方法

インド・ゴア社会の演劇ティアトルは、ボンベイ (現ムンバイ) で生まれた。ボンベイとゴアが脱植民地支配 (前者は英国、後者はポルトガル) の過程を経るなか、ゴアのティアトル関係者が新たな大衆文化の技法 (主に映画) を取り入れ、インドという国家の中で地域社会を想像するやり方を発展させていった経緯の考察を行うため、主に現地での人類学的フィールドワークの手法を用いてデータ収集を行った。中心となったのは、ゴアとムンバイ (旧ボンベイ) のティアトル関係者への聞き取り調査である。劇団主宰者、脚本家、俳優、ミュージシャン、メイクアップアーティスト、批評家などに聞き取り調査を行った。質問項目をいくつか用意したが、会話の中でインタビュー対象者に自由に語ってもらった非構造化インタビューの方法を用いた。聞き取りで得られた語りと、関係者から得られたティアトル劇の古いチラシや写真などの資料を併せて、当時のティアトルの公演状況や関係者のネットワーク、ティアトルの観客であるボンベイのゴア人移民の生活の再構成を試みた。現地調査中に上演されていたティアトルを観劇し、テーマや出演俳優などの最近の傾向を把握するとともに、ティアトル劇のDVDと劇中歌カントーのCDの収集を行った。また、インドの大衆文化の発展については、文書館での資料収集とともに先行研究のレビューを行った。

ゴアの人々がティアトル劇を通じてグローバル公共圏において自らの声を発していくことの意味については、ティアトル劇がゴアの言語コーンカニー語で上演されることから、これまで報告者が実施してきたコーンカニー語を事例とした多言語社会インドにおける地域語の研究との関連で考察を深めた。

4. 研究成果

平成 21 (2009) 年に 2 回、平成 22 (2010) 年度に 1 回、平成 24 (2012) 年度に 1 回、合計 4 回の現地調査をゴアとムンバイで実施した。20 数名に上るティートル関係者 (劇団主宰者、俳優、裏方、脚本家、批評家など) に対する聞き取り調査を行った。彼ら/彼女たちがティートルに関わるようになった経緯、ネットワーク、海外公演の経験、1950 年代から 1990 年代までのティートルの状況を中心に質問を行った。平成 24 年度にムンバイでティートル俳優を中心に実施した聞き取り調査では、インタビューのビデオ撮影を行った。往年のティートル公演や海外公演の様子がわかる古いチラシ、写真を関係者から提供してもらい、デジタル化した。ゴアでは、ティートル公演が実施される常設劇場 (Kala Academy Goa、Gomant Vidya Niketan、Ravindra Bhavan (Margao)、Ravindra Bhavan (Churcorim)) と、ティートル関係のワークショップやコンテストを開催する機関であるゴア・ティートル・アカデミー (Tiatr Academy of Goa) を訪問し、ティートル劇の現状把握に努めた。ムンバイでは、1950 年代から 1980 年代にティートル公演の中心地であり、ゴア・クリスチャン・コミュニティが集住していたドービータラオ (Dhobi Talao) 地区を訪れた。ゴア・クリスチャンが店主であり、1950 年代から 1980 年代まで、ティートル公演のチケット販売の窓口であった旅行代理店と、ゴアの各村落が出稼ぎに来た村民のために開設したクラブ (*kudd*) の一つを訪問した。クラブでは委員会のメンバーに聞き取りを行った。クラブは、ボンベイに出てきたゴア・クリスチャンが集団生活を送る場所だった。ティートルの観客の多くがクラブに居住する人々ただだけでなく、クラブで生活し、ティートルの脚本を執筆した俳優がいたこともわかった。また、ティートルが上演されていた場所の確認を行った。ティートル劇の中心地だった Princess Theatre Bhangwadi は既に閉鎖され、跡地にマンションが建っていたものの、いくつかの劇場は他言語の演劇を上演する場として存続していた。劇場以外にも、イエズス会経営の St. Xavier College やキリスト教会付属学校の講堂を利用して、ティートルが上演されていたことが明らかになった。

ティートルをインドの大衆文化の発展の中に位置づける作業として、マハーラーシュトラ州文書館で Times of India 紙を閲覧し、ボンベイにおける演劇・映画産業の状況を把握する作業を行うとともに、プリント・メディアや映画に代表される 20 世紀インドの大衆文化の発展に関する研究レビューを行った。

まとめれば、現地調査から以下 3 点が明らか

かになったといえる。(1) 1950 年代から 1960 年代にかけて、ボンベイのゴア・クリスチャンの移民ネットワークの中で現在のティートル公演の形式が確立されたこと。

(2) ティートル俳優やミュージシャンたちは、映画産業ボリウッドと深い関わりを持っていたこと、(3) 1990 年代にティートル公演の中心地がゴアに移動したこと。ここで 2 点目に挙げたインド映画産業とティートル俳優・ミュージシャンとの関わりは、インドの大衆文化の系譜にティートルを位置づけるうえで重要である。1950 年代には、主流のヒンディー語映画界に、ティートル劇にも出演していた Mohana Cabral が女優として進出した。また、1960 年代には、ヒンディー語映画のミュージシャンとして活躍していた、Frank Fernand が「私たちの幸運 (Amchem Noxib)」と「運命 (Nirmon)」の 2 本のコーンカニー語映画を製作した。これらの映画には、ティートル俳優が出演し、撮影は、ヒンディー語映画が撮影されていたスタジオで実施された。さらに Frank Fernand 以外にも多くのゴア人ミュージシャンがインド映画製作に関わっていたことがわかった。

現地語コーンカニー語でティートル劇が演じられ、劇の物語の中でテーマとして扱われるゴア社会の問題が観客に共有されるというプロセスがグローバル化された公共圏の中で果たす役割については、上記で既に述べたように、これまで報告者が実施してきた、コーンカニー語を事例とした多言語社会インドにおける地域語の位置づけについての研究と関連づけて考えを深めた。コーンカニー語日刊新聞の発行部数は英語新聞、マラーティー語新聞と比べると圧倒的に少ない。コーンカニー語による地元ケーブルテレビの番組は徐々に増えつつあるが、それでもまだ少ない。ティートル劇は常設劇場と村落での公演を併せると、毎日複数の劇団が公演を行うほど人気を得ている。それは、ローカルな事件やゴアの政治家に対する批判を物語や劇中歌カンタールで行っているからである。ティートルが一種のメディアとして、コーンカニー語の現地語公共圏を形成しているといえる。その一方、ゴアでは英語を教育語とした学校に子女を通わせる人が増加しており、コーンカニー語を話さない若者が増えていと言われている。このような動きの中、今後ティートル劇がどうなっていくのか、見ていく必要がある。

本研究期間中に、3 本の論文、3 回の学会発表、4 冊の図書 (共著) などで研究成果を発表した。また、ボンベイのティートル関係者のインタビュー映像を編集し、10 本のインタビュー映像作品を完成させた。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計3件)

- ①松川恭子 2010 『『ことば』の科学?—インド、ゴア社会におけるコンカン語文字問題についての一考察—』、『奈良大学紀要』vol. 38: 101-113 査読無。
http://repo.nara-u.ac.jp/modules/xoonips/listitem.php?index_id=1314
- ②松川恭子 2011 「ゴア州の大衆演劇ティアトルにみるインド近代演劇の地域的展開—「伝統」をめぐる議論を中心に」INDAS Working Papers No.2 (人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」) 1-15 査読無。
http://www.indas.asafas.kyoto-u.ac.jp/wp_list
- ③松川恭子 2011 「インドにおけるポルトガル植民地支配と村落—ゴア州のコムニダーデ・システムの現在をめぐって」、『コンタクト・ゾーン』vol.4: 97-115 査読無。

[学会発表] (計3件)

- ①松川恭子 2009 「インドにおける近代演劇の地域的展開—ゴア州の大衆演劇ティアトルを事例として—」(日本南アジア学会第22回全国大会(於 北九州市立大学/福岡県、10月3日))
- ②Matsukawa, Kyoko
2010 “Transformation of Local Language Politics: Church Involvement in Konkani Publications in Roman Script in Goa” a paper presented at International Conference “The City in South Asia” organized by the Centre for Contemporary India Area Studies at the National Museum of Ethnology (Suita, Japan, July 19, 2010).
- ③松川恭子 2011 「舞台を介した故郷とのつながり—インド・ゴア社会、ティアトル劇の複数メディアによる展開」(日本文化人類学会第45回研究大会(於 法政大学/東京都、6月12日))

[図書] (計4件)

- ①2010 田中雅一・田辺明生(編)『南アジア社会を学ぶ人のために』世界思想社。
- ②2012 立川武蔵・杉本良男・海津正倫(編)『朝倉世界地理講座4 南アジア』朝倉書店。

③2012 金基淑(編)『カーストから現代インドを知るための30章』明石書店。

④2013 田中雅一・奥山直司(編)『コンタクト・ゾーンの人文学<第4巻> Postcolonial/ポストコロニアル』晃洋書房。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松川 恭子 (MATSUKAWA, KYOKO)
奈良大学・社会学部・准教授
研究者番号: 00379223

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし